大分合同新聞

ワークシート

「しんぱぱ・しんまま」

年　　組　　名前

① 田崎さんはどんな問題意識から会を立ち上げたのでしょうか。記事から読み取ってみましょう。

② 田崎さんにとっての会を作った効果と、それでもふと頭をもたげてくる思いを、記事からまとめましょう。

父子家庭の支えに

戸惑う子育て、仕事との両立…

解決策、一緒に探ろう

おおいたしんぱぱ・しんままの会

離婚や死別などさまざまな理由から、独りで子育てしている父親たちの輪をつくろうと、大分市などで活動する「おおいたしんぱぱ・しんままの会」。代表の田崎圭一さん(46)＝別府市＝も、〝しんぱぱ〟（シングルファーザー）として2人の息子を育てている。弱音を吐けずに悩みを抱え込むシングルファーザーは少なくない。子どものためにも、父親たちが前向きに暮らせるよう、一緒に解決策を探っている。

シングルファーザーが前向きに子育てできるよう取り組む田崎圭一さんと、次男の太星君。子どもの成長は何よりうれしい

田崎さんの妻扶実子さん(39)は、約10カ月の闘病かなわず2008年に亡くなった。当時長男太陽君は5歳、次男太星君は1歳。残業が当たり前の営業職で、家事も子育てもほとんど妻任せだった生活は一変した。

会社の理解はあったものの、学童保育のお迎え時間に間に合うよう仕事を調整したり、子どもが熱を出して会議の途中で抜けたりと、思うように働けないジレンマは大きかった。「必死すぎてどう毎日をこなしたか覚えていない」と苦笑いする。

困ることはたくさんあっても、子育てサークルなどは女性ばかりで参加しにくかった。孤独に子育てしている男性が悩みを共感し合い、情報交換できる場を、と14年、会を立ち上げた。30～40代の男性メンバー数人が集まる交流会では「料理のレパートリーが少なく栄養の偏りが心配」「娘への接し方に戸惑う」など、父子家庭ならではの話が出て、参加者の気持ちが少し楽になる。経験からアドバイスし合うことも多い。

「母親の分まで」と気負うことをやめ、肩の力を抜いて子育てできるようになってきたという田崎さん。休日に食事を作り置きするなど、生活リズムも定着した。それでもふと、「母親がいたら」と考えてしまうこともある。「完璧な父親ではないけど、子どもたちと一緒に頑張っている。同じような境遇の人に、まず一歩、気軽に参加してもらいたい。大変だけど、きっと何とかなりますよ」

（三上奈穂子）

メモ　2010年の国勢調査によると、県内の父子家庭は891世帯。ひとり親家庭の就労支援や法律相談などに取り組む県母子・父子福祉センターに寄せられる年間約130件の相談のうち、父子家庭によるものはわずか3件ほど。相談員の柳井勝博さんは「孤立している父子家庭は多く、イベントなども参加は母親ばかりなのが現状。広報も含め、どう支援に結び付けるかは課題」としている。

（2017年1月26日付朝刊文化面）

③ 子育てに困っている人に、周りができることは何があるでしょうか。考えてみましょう。